



## 続・神緑会の歴史：父の思い出（特別寄稿）

小川， 晶三

---

(Citation)

神戸大学医学部神緑会学術誌, 8:148-149

(Issue Date)

1992-06

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81007251>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81007251>



## 続・神緑会の歴史

——初代校長・小川瑤五郎氏——

第7巻(平成3年)では“神緑会の歴史”として創設期をめぐって編集委員会編の特集を組んだ。

今回は昭和19年(1944年)に県立医学専門学校の初代校長に就任された小川瑤五郎氏について、ご子息である本学34年卒小川晶三君(現ハワイ大学医学部助教授)に依頼し、「父の思い出」を寄稿して頂いた。約50年前の神大医学部あけぼのの様子が鮮明に浮かび上がるのではないかと期待する。

### 父の思い出

ハワイ大学内科助教授 小川 晶 三



私は父の晩年の子であつたので、その思い出は昭和の激動期10年余りのもので、それもこれだけ年月が経つと記憶も遠のき、いい思い出ばかりしか浮かんで来ず、全く慈父と

いった父親像になってしまつて御退屈様でしょうが、梶田先生に一度大学創立者のプロフィールをとすすめられ、海外に居る気安さから神戸時代の父を思い出すままに綴りたいと拙い筆をとった次第です。又誰かが何かの機会に私の知らない京都時代の父を描いてくれるともっとはっきりした人物像が再現されるかも知れません。

父は大阪の医師小川光斉の三男として生れたのですが、男の兄弟が早逝したので、小川家を継ぐ宿命にあり勉学に励んだ様です。

北野中学から五高を経て東京大学医学部を首席で卒業、青山内科に入局する筈が教授の勘気に触れ、京大大学院で二年を過した後、長崎医専の教授として赴任、時あたかも明治政府の欧米を見習え追いつけの政策で官費留学として、

ハイデルベルグ大学に入学、ロンドンその他欧州を視察、ノーベル生理学賞に輝くスターリング等に教えを乞うたのもこの頃の様です。

帰朝後京大医学部より学位を授与され京都府立医専の教授に就任し、再び六ヶ月余りの第二回欧州視察に出掛けています。京都府立医専が医大に昇格后学長を勤め上げた後、昭和3年当時近代的病院建築の華とされた県立神戸病院に当時の県会議長山脇氏の知遇を得て転任、御影に家を新築し、昭和26年5月に死去する迄を過しました。私は丁度父の全盛期に生まれたので、時間的にも経済的にも余裕があつた頃で、父との触れ合いが比較的多かつたのは、幸いでした。北野中学には着物で通学した事、当時紹介されたベースボールを始めた時つき指をして小指がそれ以来曲っている事、五高では小泉八雲や夏目漱石に習った話、東大でベルツ水のベルツ先生に顔色が悪い等と云われたり、初期の東大医学部の内科教授、青山胤通、入沢達吉先生の事、その頃は学生でもヒゲをたくわえて三四郎池の畔りで写っている写真、二度にわたるヨーロッパ旅行の話や、彼地よりの美しい絵葉書を見たり、聞いたりして育ちました。幼少期の男の子が誰でも好きな様に院長用の自動車の前で、

「ブーブー大好き」といっている写真が神戸新聞にのっている切り抜き等はまだ幼なすぎて記憶にないのですが、関西風水害で停電した家の中で、病院の事を心配していた父の姿が最初の記憶としてよみがえって来ます。当時の日本一高い授業料といわれた甲南へ、幼稚園から進めてくれたのも受験勉強を極力避けられる様にとのありがたい親心だったと感謝しています。父に連れていってもらった神有沿線の苺狩り、松茸狩り、蛸狩り、鯉つかみ等、忘れ難い思い出です。混み合う神有電車で幼い子供達をかばう父の姿が印象に残っています。

家から徒歩で三十分程の小学校に行く時も散歩がてらついて来て途中の氏神様、弓絃羽神社にお参りし短歌や俳句の手ほどきもしてくれたものです。今でも覚えているのは「朝毎に通う学びの道すがら神に祈りて心正さん」の一首です。

とにかく和魂洋才の明治人、いろんな事に興味をもって野球、ダンス、ボート、謡曲などをやり、特に謡いは親戚、友人、弟子達にもすすめて皆で楽しんでいました。父は語学的才能には恵まれていたのか留学時代も余り苦勞した様子はないのですが、研究者としてよりも臨床医、それも教授時代が長かった為医学教育には熱を入れていた様で戦時中「県病」をもとにでき上ったばかりの兵庫医専の校長として、当時人気のあった「話の泉」や「二十の扉」を利用して学生さんを教えて好評を博した様です。私が小学校の5年の時集団疎開先の丹波の恵日寺にやって来て皆を相手に健康講話をして照れ臭い反面誇らしく思った事もありました。

戦後は小児病院の玉木先生の父君、玉木衛生部長と共に駐留軍のサムス少佐と交渉し県衛生行政にも真剣にとりくみ忙しく過してしまし

た。ドイツ語一辺倒だった日本の医学にラジオの平川唯一さんのカムカム英語を毎日一緒に聞いたり、アメリカ文化センターに通ってアメリカ医学の紹介につとめていました。引退後も兵庫県医師会長を勤めたりいつも活動的で、小生が数学の難題で困っている時も、自分なりに解いて見せて得意気でした。とにかく、かけこの早かった小学生の私と競争したり、グラブをねだると速球を投げて捕球させて験したり、死ぬまで現役といった感じでした。

しかし分はよく知っていた様で医専が医大に昇格した時点で自づから正路先生を口説いて学長にお願いして引退しました。

文才がない事をいつも歎いて余り書いたものが残っていませんが、話はよくした様で、その為のメモはいろいろ残っています。ウォルサムの時計をチョッキから出している姿や、二重まわしをつけた明治的オシャレ感覚はほほえましい欧米的ショウオフの現れかも知れません。タバコはやらず、晩酌の一合の酒でおかずを皆食べて母が困っていた事や、熱い朝粥が好きで胃に悪かったのではないかと考えています。

亡くなる時は、東京の学会に出席した後、気分を悪くし腹部の腫瘤に気付いた時は、既に手遅れで藤田教授の執刀で手術は行われものの帰らぬ人となりました。

最後まで病院のベッドの上から大学をいつまでも眺めて感慨深げにしていたのが思い出されます。いつも日本が近代化の道を歩んだ、いい時期に活躍できて幸せだった事、すばらしい先輩同輩、後輩に囲まれて死後もアロキサン糖尿で有名な、岡本教授に病理解剖してもらって骨格標本を第一解剖学教室で守って頂いて幸福な一生だったという思いです。